

The Four Gospels in One Story
1949
by Freeman Wills Crofts

目次

著者からの提案 5

まえがき 5

聖ルカによるまえがき 17

四つの福音書の物語

21

訳者あとがき 357

解説 横井 司 361

著者からの提案

福音書を読んだことのない読者、ないし内容を漠然としか憶えていない読者はまず第五章から読み始め、読了後に第一章から読み直すようお願いする。

まえがき

本書は福音書の物語を現代的な表現で提示し、神学に通じていない人でも簡単に読めることを目的とした。つまり四つの福音書を統合して一つの連続した物語とし、全体を口語で書き換え現代の伝記と同じ形にするというものだ。

福音書には数多くの不統一や矛盾があるため、その大半は現実の出来事の記録として認められないとされているが、本書はそうした批判に 대응べく生み出されたものである。

だがそのような批判は、著者が成長するなかで信じるに至ったことと真っ向から反しているため、自らの目で確かめようと決意した。そこでまず、福音書の各著者が記したいいくつかの出来事を選び、一つにつきなご合せようと試みたのだが、不統一や矛盾が見つかるどころか、それぞれの内容を結びつけている正確性の高さに驚いたものである。

だがその一方で、大勢の人が気づいていながら、著者自身が認識していなかった別の問題に突き当ることもあった。記述の大半につきまとう曖昧さがそれである。

当然の流れとして、著者は注解書に目を向けた。それによって多くの問題が解決したものの、広く

認められた解釈の存在しない文章もいくつか見つかった。

やがて、たとえ記述が曖昧であっても、原典の文章そのものでなく、注釈者の大半が支持している意味を物語に挿入すれば、神学に詳しくない読者にとってより明解になるのではという考えが浮かぶ。書き換えを行なったことを注記し、原典の文章もきちんと併記するならば、そうした方法も認められるだろう。本書では各章末に註を設けることで、それを行なうこととした。

取り扱う出来事の数が増えるにつれて、福音書の物語全体を、伝記の形をとった単一のストーリーにするという考えが徐々に形をなしてきた。その詳細な方法についてはのちに記す。

当然ながら、著者に特別な知識や、本作の作業に必要な能力があると主張するつもりはない。聖書の解釈は英語の翻訳と注解書だけが頼りである。したがって、本書の内容はいかなる意味においても権威のあるものではなく、既存の素材を現代的な形に再構成する、一素人の試みに過ぎない。

最初は純粋な趣味として作業に取りかかったのであって、著者自身の知識を大きく広げたこの体験が、他の人々にとっても有益ではないかと考えるようになったのは、完成が間近に迫ったときのことである。本作が刊行に至ったのは、それが理由に他ならない。

キリストとの出会いは人間の本質を変え、普遍的に求められる高潔さ、勇気、そして無私の心の人々を目覚めさせた。著者は作業を進めるなかでそのことを痛感したが、各福音書を単純な物語として提示することで、原典に心惹かれなかつた人にもそうした出会いをもたらしたいと願うものである。付け加えるなら、各章の註は本作に必要な構成要素であり、決して省略されるべきものではない。それによって、学生、教師、日曜学校の講師、勉強会のリーダー、そして容易に入手可能な初歩的知識を求める人々の役に立つことを望む。

・作業を進めるにあたって

本書の作業を進めるにあたっては、次の三点を必要とした。

- 1、四つの福音書の内容を一つのストーリーにまとめる。
- 2、抽象的または難解な文章を単純化する。
- 3、記述全体を現代の言葉および文体で提示する。

次にこれら各段階を詳しく説明する。

- 1、四つの福音書を一つのストーリーにまとめる

各福音書を一つにまとめる試みはこれまでも数多くなされているが、著者の知る限り、本書のよう到大衆向けに構成されたものは一つもない。

またデアテツサロン(シリア生まれのキリスト教護教家タテイアノスが各福音書を統合して物語にした書籍)をはじめとする福音書の統合の試みは、いくつ

かの点で有益だとされている。出来事や教えの多くは、各福音書の記述で補強することにより一層充実したものとなるからだ。その顕著な例が最後の晩餐の記述であり、共観福音書(四福音書のうちマタイ、マコ、ルカが著者のもの)がキリストの教えと祈りを省いている一方、ヨハネによる福音書は聖餐の制定を省略している。また裁判、復活、そして偉大なる四十日間の各記録も、四つの福音書を併せて検討することで新たな意味を持ち、より鮮明なものとなる。さらに、きわめて些細な出来事であっても、そうすることで物語はより優れたものとなる。たとえばキリストが水のうえを歩いた一件をとってみても、ルカがそれをまったく記録していない一方、キリストが大衆から姿を隠そうとした理由を説明しているのはヨハネだ

けであり、弟子たちが小舟を漕ぐのに疲れた様子を記述しているのはマルコだけ、そしてペテロが水
のうえを歩こうとしたことを記しているのはマタイだけなのである。

当然ながら、各福音書の記述を疑問の余地なく正確に統合するのは、詳細について互いに矛盾があ
るなどの理由で不可能である。しかしそれは、異なる記録者がそれぞれ誠実に記録を行なった結果だ
と考えるべきだろう。その実例として、ペテロの否定に関する第十六章註8を参照されたい。またキ
リストによる教えの内容も、各福音書で厳密に同じなわけではない。さらに、一連の出来事が起きた
順序についても、各福音書で異なっているものが数多く存在する。同様に、複数の福音書に記された、
似た内容ではあるが同一でない出来事について、それらが二つの異なる出来事なのか、あるいは同じ
一つの出来事をそれぞれ異なる情報源を基に記したもののなのかも、いまとなつては正確にはわからな
いのである。

このような、類似してはいるが同一かどうか疑わしいエピソードについては、別個に検討したうえ
で、著者の目にもつともふさわしく映る結論を採用した。もちろん、それらの結論が正しいと断言す
るつもりはなく、またそうすることもできない。十分に合理的である、というのが関の山である。そ
うした事例については章末の註に特記し、様々な異なる見解を提示するとともに、本書でその結論を
採用した理由も述べている。

2、第二の段階は、抽象的ないし難解な記述を、現代的なよりわかりやすい表現に書き直すこと
であり、少なくとも著者の見る限り、これが本書の作業でもつとも重要な部分である。その目標とする
ところは、単に福音書を現代の言語に書き換えることではなく、その文章を広く認められた意味を基

に表現し直すことである。

こうした試みを行なうなかで、間違いの生じる余地が二つある。その一つは、表現の直し方が不十分で意味が不明瞭になるというものであり、これが生じると作業の目的そのものが失われてしまう。また他方では原典の意味から大きく逸脱するという危険性があり、その結果生まれた作品は福音書の解釈ではなくなってしまう。さらに、福音書の記述の正しい意味が突き止められないケースも数多く存在する。こうした理由と、加えて著者自身の限界もあって、新たな解釈が原典の意味を正しく伝えていると断言するのは不可能であり、またそう主張するつもりもない。この場合も、十分合理的である、ということと満足しなければならぬ。原典の書き換えを行なった箇所については、各章末の註にその旨を記した。

本書で用いた方法を紹介すべく、例を二つ挙げる。最初の例は、八つの幸福に関する単文の書き換えである。

マタイによる福音書515

・ 欽定訳聖書

「従順な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐからである」

・ 改訳聖書

「従順な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐからである」

・ モファット新訳

「柔和な人々は幸いである！ その人たちは地を受け継ぐ」

・ウエイマス新訳

「従順な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ」

・グッドスピードおよびスミス新訳（アメリカ訳聖書）

「謙虚な心の持ち主は幸いである。地はその人たちのものである！」

・本書

「多くを求めず、自らの権威に寄りかかったり権利を主張したりしない者は幸せである。彼らはこの世においても勝利を収める」

・当該箇所に関する本書の註

「原典では『従順な人は幸せである。地を受け継ぐのはその人たちである』

通常この一節はマタイによる福音書5-3の変種と理解されており、『従順な (Blessed)』は『信心深い (snoïd)』を意味する。しかし本書では、この世で正しき人が悪人に勝利を収めるという賛美歌37-11の内容を基にした」

現代の読者にとって「従順な」という単語は、弱さや意気地のなさを意味するものであり、キリスト教について真実に反する捉え方をされてしまいかねない。さらに、そうした人にとっては、「地を受け継ぐ」という表現もまったく意味を持たない。

現代の各新訳は、キリストの言葉の意味を現代的な精神に合致するよう表現したものである。また偶然ながら、ここで用いられているいずれの語も、一つないし複数の注釈書で提案されたものである。

二つ目の例は、四人の福音書著者のうち三人によって記された文章であり、書き換えに加え統合の実例を示すべく、ここに紹介する。

・欽定訳聖書

マタイによる福音書13-12「持っている人は与えられ、さらに豊かになる。しかし持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

マルコによる福音書4-24、25「これから聞くことを心に留めなさい……持っている人は与えられ、持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

ルカによる福音書8-18「だから、どう聞くかに注意しなさい。持っている人は与えられ、持っていない人は、持っていると思うものまで取りあげられる」

ルカによる福音書19-26「言っておくが、誰であっても、持っている人は与えられ、持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

・改訳聖書

マタイによる福音書13-12「持っている人は与えられ、豊かになる。しかし持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

マルコによる福音書4-24、25「これから聞くことを心に留めなさい……持っている人は与えられ、持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

ルカによる福音書8-18「どう聞くかに注意しなさい。持っている人は与えられ、持っていない人

は、持っていると考えるものまで取りあげられる」

ルカによる福音書19-26「言っておくが、誰であっても、持っている人は与えられるが、持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

・モファット新訳

マタイによる福音書13-12「持っている人はさらに与えられ、しかもより豊かに与えられる。しかし持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

マルコによる福音書4-24、25「これから聞くことに注意しなさい……持っている人はさらに与えられるが、持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

ルカによる福音書8-18「だから、どう聞くかに注意しなさい。持っている人はさらに与えられるが、持っていない人は、持っていると考えるものまで取りあげられる」

ルカによる福音書19-26「言っておくが、誰であっても、持っている人はさらに与えられるが、何も持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

・ウエイマス新訳

マタイによる福音書13-12「持っている人はさらに与えられ、豊かになる。しかし持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

マルコによる福音書4-24、25「これから聞くことに注意しなさい……持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

ルカによる福音書8―18「だから、どう聞くかに注意しなさい。持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると考えるものまで取りあげられる」

ルカによる福音書19―26「言っておくが、誰であっても、持っている人はさらに与えられ、何も持っていない人は、持っているものまで取りあげられる」

・グッドスピードおよびミス新訳（アメリカ訳聖書）

マタイによる福音書13―12「持っている人たちは、さらに多くのものが豊富に与えられる。何も持っていない人たちは、持っているものまで取りあげられる」

マルコによる福音書4―24、25「これから聞くことに注意しなさい……持っている人たちは、さらに多くのものが与えられ、何も持っていない人たちは、持っているものまで取りあげられる」

ルカによる福音書8―18（当訳書では省略）

ルカによる福音書19―26（当訳書では省略）

・本書

第十二章註34の箇所

「イエスはそこで言葉を切ってから、こう続けられた。

『さて、何に気をつけるべきか、しばらく考えてみなさい。言っておくが、自分の才能を見事に活用した者はそれをさらに高め、より有能で立派な人間になるだろう。しかし好機を見逃す者は、自分が持っている力まで失ってしまう』」

・当該箇所に関する本書の註

「原典では『だから、どう（あるいは何を）聞くべきかに気をつけなさい。言っておくが、持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取りあげられる』」

一読してわかるように難解な文章である。恐らくは精神の領域で、自然の力を使ったことによる成長、およびそれを無視したことによる退化を指すものと解釈するのが一般的である。本書でもその解釈を採用し、意味を強調するために修正を加えた」

この文章は、現代の読者にとって理解が難しいだけでなく、なかには不快に感じる人もいるだろう。「どう聞くかに注意しなさい」とはどういう意味か。金持ちがさらに与えられ、貧者のものを残らず得るといえるのは、たとえ倫理に反していなくとも、不公平ではないか。また何も持っていないのなら、いったい何を取りあげられるというのか。

本書の解釈はこうした問題を避けるための試みであり、大半の識者もそのように論じている。当然ながら、これがキリストの本意だと断言することはできないが、この一節を謎のままにして読む気もなくさせるよりも、大半の識者がキリストの本意だと考えていることを明らかにするほうが望ましいはずであり、事実そのように論じられている。

3、記述全体を現代の言語および形態で提示する。

難解な記述の書き換えが認められたならば、統一性を保つために記述全体の書き換えが必要となる。

著者は欽定訳聖書の壮麗な英語を軽んじるものではないが、本書で現代の口語的な英語を採用したのにはいくつか理由がある。まず第一に、現代的な翻訳は「欽定訳聖書という音楽」に比べ、「市井の人々」の関心をはるかに強く惹きつけると、多くの宗教関係者が指摘していることが挙げられる。第二に、キリスト教を受け入れるにあたって問題を感じている人々に対し、宗教関係者は口語訳聖書を読むよう勧めている事実が挙げられる。そして最後に、どうしても馴染めないという理由で聖書への関心を失ってしまった人々に対し、再び興味をかき立てる物語を作りたいと思ったことが挙げられる。またそれとのつながりで、原典の記述があらゆる点で適切だとしても、言葉を変えたほうが望ましい箇所があったことはここに記しておくべきだろう。

本書の作業にあたっては、数多くの書籍や注釈書を参考にした。ここに感謝を述べるとともに、とりわけ有意義だったものを以下に記す。

The Four Gospels in Parallel, Sir W. J. Herschel S.P.C.K

The Synoptic Gospels, Arranged in Parallel Columns J. M. Thompson. Oxford University Press.

The Four Gospels, B. H. Streeter. Macmillan & Co. Ltd.

A People's Life of Christ, J. Paterson Smyth. Hodder & Stoughton Ltd.

The Life of Jesus, C. J. Cadoux. Penguin Books Ltd.

Helps to the Study of the Bible, Oxford University Press.

The Clarendon Bible, Oxford University Press.

The Century Bible, Thomas Nelson & Sons Ltd.

The Cambridge Bible, Cambridge University Press.

The Moffatt New Testament Commentary, Hodder & Stoughton Ltd.

A New Translation of the Bible, Moffatt, Hodder & Stoughton Ltd.

The New Testament in Modern Speech, Weymouth, James Clarke & Co. Ltd.

The Short Bible, Goodspeed and Smith, Cambridge University Press.

聖ルカによるまえがき

わたしたちの信仰を打ち立てる土台となった数々の事実については、これまで多くの人たちが記録を試みました。彼らはそうした事実を、それらの出来事を直接目のあたりにした兄弟たちから聞かされたのです。⁽¹⁾ わたしの主であるテオピロさま、わたしも最初からこれらの出来事を丹念に調べておりますので、あなたのためにその記録を順序立てて記すべきだと感じております。それは、あなたのお知りになった真理について、疑問を残らず打ち払うためであります。

註

1、福音書の成立。キリストの死後、その生涯と教えの記録は集められたあとまず口頭で伝えられ、その後、ルカがまえがきで記しているように、様々な人たちの手で文章として記録されたと考えるのが合理的である。現存するキリスト教関係の最初の文書は使徒の書簡であり、また最初の福音書は聖マルコによるものである。その完成はキリストの死から三十ないし四十年が経過した紀元六十七年ごろと考えられている。その一方で、現在では失われたQ文書の存在があり、その一部が復元されている。それから十ないし二十年後、つまりキリストの死から五十ないし六十年が経過したころ、マタイおよびルカによる福音書が成立したものとされる。その大部分はマルコによる福音書とQ文書を土台としているが、最初の三章はキリストの「出生」物語となっており、また別の箇所——ルカによる福音書ではとりわけそれが長い——も、異なる未知の記録を基にしたものである。ヨハネによる福音書が記されたのはさらに遅く、最近の発見によると一世紀が終わる直前だったことが示唆されている。

当時は他の福音書も存在していたが、ごく初期の段階から、マタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネによる福音書だけが教会に受け入れられていた。

ごく大ざっぱに言えば——ゆえに不正確にならざるを得ないが——、マルコによる福音書は異邦人向けに書かれ、主としてキリストの行ないを簡潔に記したものとされている。マタイによる福音書はユダヤ人向けのもので、とりわけ旧約聖書のメシアに関する預言を、キリストがどのように実現したかを述べている。またルカはきわめて優れた作者であり、キリストの生涯を他の誰よりも完全に記録している。その福音書は世界でもっとも美しい書物、と呼ばれているほどだ。そしてヨハネはキリストの霊的・神秘的な教えを記述しており、史実として理解されることを意図しなかったと考える者もいる。とは言え、本書のように各福音書を一つに統合しようと試みるならば、どの福音書も歴史的事実と教えの記録として、等しく扱わねばならないのは明らかである。

十九世紀の幕が降りようとするころ、その他の古代文書を検証すべく用いられていた文書批判の法が、聖書についても適用されるようになった。それによってまず、逐語靈感説という旧来の考え方が否定された——ペテロの否認に関する各福音書の記録がその一例。第十六章註8を参照のこと——のを皮切りに、次から次へと聖書の記述に疑問が呈され、ついには全体の信用性が強く疑われるに至った。また数十年の長きにわたり、聖書のストーリーは科学的知識によって反証されると信じられていた。だが現在では、それと逆の意見が主流を占めている。つまり、聖書に敵対的な文書批判は最近の発見によって大部分が覆され、また聖書の記述内容と目的をより明確に知ること、科学的見地からの反証もおおよそ解決されるに至ったのである。かくして、一言一句間違っていないという盲目的信仰の段階、そして内容全体に対する疑念の段階を経て、聖書批評は現在、そこに内在する真実性と

信用性を再び受容する方向に進んだと言われている。

第一章 キリストの生誕と幼少期

ヘロデ大王がユダヤの王だった紀元前六年、ザカリヤという聖職者がこの地域に住んでいた^①。アビヤ組の祭司であり、妻エリザベツはアロン家の娘である。二人は立派な夫婦で、神をあがめ非の打ち所がない生活を送っていたものの、子どもがおらず、年齢を考えれば今後もうけられるとも思われなかった。

ある日のこと、その日当番だったザカリヤはエルサレムの寺院で祭司の務めを行なっていたが、そこで一つの幻を見た。司祭のしきたりにしたがって籤を引き、至聖の内陣で香を焚くあいだ、外では人々が祈りを捧げていた。そのとき、天使がザカリヤの前に現われ、香壇の右側に立ったのである。ザカリヤは恐れおののいたが、天使はこう言つて安心させた^②。

「恐れることはありません、ザカリヤよ。あなたの祈りは聞き入れられ、エリザベツは男の子をもうけるでしょう。その子をヨハネと名づけなさい。彼の誕生はあなたたちだけでなく多くの人々に喜びをもたらします。神が認めるところの偉大な人となるのですから。ワインや強い酒を飲ませてはいけません。その子は誕生の日から聖霊に満たされ、イスラエルの多くの人々を神の御許に立ち帰らせるのです。彼はエリヤの霊と力をもってメシアに先立つ者となり、親と子の心を一にしたうえ、悪人をして知恵と正義の道へと向かわせるでしょう。こうして人々に、来たるべき神を迎え入れさせるの

です」⁽⁴⁾

ザカリヤは尋ねた。

「そうなることがどうして信じられましょう。わたしは老人ですし、妻も歳をとっています」

天使は答えた。

「わたしはガブリエル、神より遣わされし者。このよき知らせを伝えるため、あなたのもとに遣わされたのです。しかし、あなたはわたしの言葉を信じなかつた。ゆえに、わたしの言ったことが現実のものとなるまで、あなたは何も聞こえず、何も言えなくなるでしょう」

そのあいだ、人々はザカリヤを待ち続け、なぜ内陣から出てこないのかといぶかしんだ。ようやくザカリヤは姿を見せたが、いつもの祝福を与えることができず、それで人々は内陣で幻を見たのだと気づいた。ザカリヤは人々に身振りで伝えたものの、一言も口にできなかつた。それでも務めの期間が終わるまで仕事を続け、それから家に戻った。

やがて妻エリザベツが子を身ごもり、五カ月のあいだ姿を消した。そのとき彼女はこう言った。「主は慈悲深くも、人々のあいだからわたしの恥を取り去ってくださいました！」

その五カ月が終わろうとするころ、神はガリラヤの町ナザレに天使ガブリエルを遣わし、マリアという名の若き乙女のもとに赴かせた。マリアはダビデ家のヨセフという男の許嫁だった。そして天使はマリアの家に現われた。

「おめでとう、選ばれしお方よ。神はあなたとともにおられます」

マリアは予期せざるこの挨拶に戸惑い、なんのことかと首をひねった。

天使は続けた。

「心配いりません、マリヤ。あなたは神に深く愛されたのです。これから男の子を身ごもることにありますが、その子をイエスと名づけなさい。彼は偉大な人となり、至高の方の息子と呼ばれるでしょう。そして神である主はその子を人々の救世主となされます。彼はヤコブの家を永遠に治め、その王国は終わることがないのです」

「どうしてそのようなことがあり得ましょう？ わたしはまだ生娘ですのに」

「聖霊があなたのもとに降り、至高の方のお力があなたを覆うでしょう。ゆえに、あなたの子は神に捧げられ、神の子と呼ばれることになるのです。いとこのエリザベツをごらんください。歳をとっているにもかかわらず、あなたと同じく子をもうけようとしています。実際、彼女はもう六ヵ月目です。神のおっしゃったことは必ずや現実のものとなるのですよ」

マリヤは言った。

「わたしは神の婢女^{はしため}。あなたのお言葉どおりになりますように」

天使が去ったあと、マリヤは急いでエリザベツのもとへ向かった。ザカリヤが住む山里へと歩き、家に入っているとこに挨拶する。エリザベツがそれを聞いた瞬間、胎内の子がおどり、彼女は聖霊で満たされた。

「ああ、あなたは選ばれし女なのね！」エリザベツは声をあげた。「あなたの子も選ばれしお方なんだわ！ わたしの救い主のお母さまがわざわざ会いに来てくださるなんて、いったいどういうわけでしょう？^⑦ あなたのお声を聞いたとき、わたしの子は喜びのあまり胎内でおどったのです。それに、

神のお約束が必ず実現すると信じるあなたは、なんと幸せなお人なんでしょう！」

すると、マリアは次のように暗唱した。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神への喜びで満ちています。

賤しい身分のこの婢女にも目を留めてくださるからです。

これから先、全能のお方がわたしになされたことを知って、どの人もわたしのことを幸せな女と言
うでしょう。

その御名は尊く、そのお慈悲は代々にわたって限りなく、主をあがめる者へと及ぶでしょう。

全能なる主の腕はその力をふるい、思いあがった傲慢なる者どもを圧倒し、支配する者どもをその座から引きずり下ろし、賤しく従順なる者たちを高みにあげ、飢えたる者の腹を満たし、富める者を空腹のまま追い返すのです。

主はわたしたちの祖先に約束なさったとおり、しもベイスラエルを支えられ、アブラハムとその子孫たちにとこしえなるお慈悲を示されるのです」

マリアは三ヵ月ほどエリザベツのところに行ったあと、家に戻った。

妻となるマリアが身ごもっていることを知った夫のヨセフは、ひどく悩んだ。彼は正しい人であり、マリアのことが表沙汰になるのを望まなかつたので、密かに縁を切ろうと決心した。⁸だがそう考えていたところ、神から遣わされた天使が夢のなかに現われた。

「ダビデの子ヨセフよ、恐れずマリアを妻に迎え入れなさい。マリアの子は聖霊によって彼女に宿っ

F・W・クロフツと四つの福音書の謎

横井 司（ミステリ評論家）

初っぱなから私事で恐縮だが、自分がF・W・クロフツの小説を熱心に読んでいたのは小学生から中学生にかけての頃だったかと思う。最初に読んだのは、『英仏海峡の謎』（一九三二）のジュヴナイル訳である『名探偵フレンチ 怪船771号』（ポプラ社・世界名探偵シリーズ版）で、江戸川乱歩訳と表示されていた。その後、あかね書房の『少年少女世界推理文学全集』に収録されている『マギル卿最後の旅』（一九三〇）と『フレンチ警部とチェインの謎』（一九二六）を読み、創元推理文庫版の『樽』（一九二〇）や『クロイドン発12時30分』（一九三四）へと進んでいった。当時、新刊書店の棚には、創元推理文庫に入っていたクロフツの邦訳本がわりと揃っており、『ボンスン事件』（一九二一）から『フレンチ油田を掘りあてる』（一九五一）まで、かなり熱心に読み漁った。『二重の悲劇』（一九四三）巻末解説の厚木淳「ノート」に掲載されていた作品リストにチェックを入れ、未訳の英題を自己流に訳して書き添えていたものである。

当時、未訳のままだった作品が、創元推理文庫に収められるようになるのは、一九七九年に『製材所の秘密』（一九二二）が新訳されてからのことで、八〇年代に入って同文庫から未訳長編が次々と訳されると並行して、ハヤカワ・ミステリ文庫にポケット・ミステリでしか読めなかった三冊――

『関税品はありませんか?』（一九八〇）、『列車の死』（一九四六）、『ヴォスパー号の遭難』（一九三六）——が、次々と収められていった。ところが、残すところ未訳長編が二編にまで迫りながら、ぱつたりと訳出が止まってしまい、そのうちの二編である『フレンチ警部と漂う死体』（一九三七）が、創刊されたばかりの論創海外ミステリから上梓されたのが、ようやく二〇〇四年になってからのこと。三年後の二〇〇七年には、クロフツ唯一のジュブナイル・ミステリ『少年探偵ロビンの冒険』（一九四七）が訳されて、さらに三年後の二〇一〇年に最後の未訳長編ミステリ『フレンチ警部と毒蛇の謎』（一九三八）が創元推理文庫に加えられて、ここに全長編の刊行が相成ったのだった。

中学生の頃、『二重の悲劇』の巻末リストを眺めていた自分は、「少年推理小説」と付記されていた『少年探偵ロビンの冒険』には強い興味を抱き、訳されないかと願っていたものだった。その一方で「四福音書現代語訳」と付記された *The Four Gospels in One Story: Written as a Modern Bibliography*（一九四九）に対しては、それが『新約聖書』に関わるものだとすらすら気づくことがなく、何だか分からないけどミステリじゃなさそうだ、と思って一顧だにしなかった。笑止といわんか。

同書についてはこれまで『四福音書』の現代語訳（紀田順一郎「クロフツとその時代」）だとか「福音書に関する宗教書」「新約聖書物語」（戸川安宣「最後の本邦未訳長編」といった紹介のされ方をしてきている。「福音書に関する宗教書」というのは、ハワード・ヘイクラフトが編纂に関わった『二十世紀著述家事典』 *Twentieth Century Authors*（一九四二）にクロフツ自身が寄せた自伝の、一九五五年増補版に補遺として加えられた部分の翻訳にも見られる表現で、原文がどのように書かれているか分からないが、これだと福音書を論じたエッセイという印象を受ける。それがエッセイでは

〔著者〕

F・W・クロフツ

フリーマン・ウィルス・クロフツ。1879年、アイルランド、ダブリン生まれ。アルスター地方で鉄道技師となるが、1919年に大病を患って療養生活を送る。療養中に書いた「樽」(20)が好評を博し、作家デビューする。体調の悪化で鉄道技師を辞した後はロンドンへ転居し、専業作家となる。57年死去。

〔訳者〕

熊木信太郎（くまき・しんたろう）

北海道大学経済学部卒業。都市銀行、出版社勤務を経て、現在は翻訳者。出版業にも従事している。

よっ ふくいんしょ ものがたり
四つの福音書の物語

——論創海外ミステリ 222

2018年11月20日 初版第1刷印刷

2018年11月30日 初版第1刷発行

著者 F・W・クロフツ

訳者 熊木信太郎

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1773-6

落丁・乱丁本はお取り替えいたします